

シナネン賞

父のおみやげ

愛媛県伊予市立郡中小学校 六年

藤井 華純

「ただいま。」げんかんで声がすると、ドアのかぎを開けるのが私の役目。真つ黒な父の顔が少し笑顔になる。「はい、おみやげ。」夏になるといつもこのおみやげがある。スーパ一のふくろをポントとわたされる。わかっではいるが、少し期待してのぞいてみる。「うえー。」鼻をつくような目にしみるにおい。そんな私の顔を見て、少しほこらしげな顔をする父。やっぱりかと思いつつ、そのおみやげを洗たく機の中に放りこむ。実は、そのおみやげというのは、汗かきな父が仕事で、何度も着がえたシャツや汗をふいたタオルたちなのだ。父の仕事は建設業。真夏の炎天下では、体感温度は三十五度以上にもなるだろう。そんな中で一日働いたあかしのおみやげだ。しかし、私はそれをわたされるといつもふきげんになってしまう。おつかれ様つと言う前に鼻をつまんでしまう。それでも父はやっぱり笑顔のまま、暑い暑いと子供のようにせんぶう機を占領してしまう。「かすみちゃん、ビール。」と、ふきげんな顔をしている私にニコニコ顔で

注文してくる。その笑顔に負けて、ビールをとりに行くはめになる。父は一気に飲みほすと、大きな手で私の頭をなでしてくれる。とても大きな手。毛ガニみたいな手。ふと、父の手をみると、節が太くて、小さなきずがたくさんある。その中で私が一番おどろいたのは、つめが割れたり、そりくり返っていたことだ。きつと、この大きな手で重い物を持ったり、小さなきずを直したりして一日中働いているのだろう。「そのつめ、痛くない？」と、私が聞くと、「痛くはないけど、不格好だね」と、もう一本ビールを飲んでいる。

私は本当は知っているんだ。つめだけではなく、腰も、うでも、ひざも、いろんな所が痛いと母にしつぷをはってもらっている父の姿を。でも、私の前では弱音をはかない。「お前たちがお父さんの宝物だ」と言って、つかれていても笑顔でだきしめてくれる。父が暑い日も、寒い日もがんばって仕事をしてくれるから、私たちは何不自由なく生活できているんだと思う。

ありがとうと面と向って言うのは、なんとなく照れくさいから、五年後も、十年後も、洗たく機までおみやげをはこぶよ。感謝をこめて。